

# メータオ・クリニック支援の会（JAM） 会報メール 第104号

[2018年3月号]

NPO法人メータオ・クリニック支援の会（JAM）支援者の皆様

いつもご支援していただき、誠にありがとうございます。  
JAM 会報メール第104号をお送りします。

JAM は2008年3月に発足されたNGOです。ビルマ/ミャンマーからタイへ貧困や戦火を逃れてきた人々の病院、メータオ・クリニックの活動を支援する目的で設立されました。

支援者の皆様へJAMの最新の活動をほぼ毎月中～下旬ごろ会報メールにて発信いたします。  
今後ともどうぞよろしく願いいたします。

<目次> [ページ]

ワンコイン支援基金のお礼

メソトマンスリー

国内から

編集後記

次号の予定



## ワンコイン支援基金のお礼

日頃よりメータオ・クリニック並びにJAMを応援頂きありがとうございます。

1月末のワンコイン支援基金では、皆様より27件201,250円のご寄付を頂戴いたしました。皆様のあたたかい応援とお気持ちにJAM一同心より感謝いたします。

皆様からの応援と共に3月にメータオ・クリニックへ上記寄付額を全額、医療・診療費として寄付いたしました。



<シンシア先生と現地派遣員：齊藤看護師>

今後とも国境の医療の現状、国境の人々の命と尊厳を守る活動にご賛同頂けますよう活動して参ります。この度は、ワンコイン支援基金へご賛同頂き誠にありがとうございました。

## メソトマンスリー

### 最近のメソット



【メソト=齊藤 つばさ】

みなさまいつもご支援いただきましてありがとうございます。メソトは日に日に暑くなってきて、日中は40度を超える日々が続いています。最近クリニックにいますと醤油が焦げたようなにおいが漂っています。(クリニックの裏にあるサトウキビ畑の匂いだそうです。)

私がメータオ・クリニックに来て一番驚いたことが、手洗いが適切な場面にできておらず、手袋を使い終わったら取るということが出来ていないことで、スタッフの手指が感染の媒体になっていたり、周囲の環境が汚染されていることです。患者さんの中にはHIVやHBVなどに感染している人もいます。易感染の状態でなければ、個室ではなく大部屋で他の患者と一緒に入院しているので、二次感染を防ぐためには、スタッフやその患者・家族の手洗いが非常に重要になり



ます。

「衛生的手洗いの基本的な5つの場面」というものがあり、手洗いまたは手指消毒を行う必要があるタイミングとして、処置の手袋をつける前・処置後手袋を取った後・手が汚染された時など決まっています。

しかし実際は、5つの場面で行われていませんでした。

例えば、おむつ交換をしてから車いすへ患者さんを移動させる時、おむつ交換時の手袋（もちろん便などにも触れている）をつけたままでその患者さんを車いすへ移乗させていることや、処置室から私を呼びに来た時、私は他のことをしていて気がつかなかったため、患者の傷口に触った手袋のままスタッフに手首をつかまれました。このときは、どんな患者に触れたのかもわからない血の付いた手袋で触れられて、気持ち悪くて吐きそうでした。（もし手袋の見た目に血などが付いていなくても、汚いです。）

「すべての患者は何かしらの感染症をもっている可能性がある」ということで、スタッフは手袋などを付けて処置を行い自分の身を守っています。しかし、処置中に若いスタッフから意見を求められて呼ばれた年配のスタッフなどは、素手で患者さんの傷口に触り処置の方向性を伝えると、手を洗わず、そのまま他の仕事するスタッフもいました。（患者さんの傷口は血や体液が出ているため感染源となる可能性があります、その手でカルテやドアなどを触ると周囲に汚染が広がってしまいます）。

赴任してから、「その使用済みの汚染された手袋でいろいろなところを触っていたら、次にそこを触る人の手が汚染されて、汚染がそこから広がるから1処置ごとに手袋をはずしてほしい。そして、手袋をはずしたら手洗いか手指消毒してから次のことをしてほしい」ということを伝えても、全然状態は変わりませんでした。

ボランティアの看護師で話し合い、「もしかして、スタッフは知識が足りなくて行動にうつせないのではないか？」という疑問があがりました。そのため、昨年11月に「衛生的手洗いの基本的な5つの場面」を口頭試問したり、目の前で手洗いを行ってもらい、手洗いの方法が理解出来ているのか確認を行いました。その結果、ほぼ全員のスタッフが手洗いの場面を言えて、きちんとした手順で手を洗うことが出来ていました。

知識があっても行動に現れていないという問題点がわかったので、やればできるのだから、やれるように、毎日口うるさく言い続ける作戦に変わりました。

スタッフと一緒に処置をしたら「片付けして手を洗うところまでがあなたの仕事だから！！はい、手洗って！！」と言うと、「これ置いたら手洗うから～」と物品を持ちながらどこかへ逃げていく(?)スタッフや、「今忙しいから、後で手を洗うから！！」と1人目の患者さんの身体拭きが終わって、次の患者さんのおむつ交換をする時など、明らかに手洗いをしてから次の行動へ移らなければならない場面で次々に仕事をしようとするスタッフなど、みんな自由すぎて、「手を洗うところ見られたくないのか？」と考えてしまうほど謎でした。

「後でとかだめだから、今手洗って！」と言い続けるしかないのか？と思いながら続け・・・。

また、私に汚い手袋で触れてきたときは「本当に嫌だからそれを辞めて欲しい」と伝えながら、スタッフの目の前で速攻で手を洗っていました。触られそうになった時は「その手袋で触らないで」と言うのと、スタッフから「触らないでって、僕（私）のことが嫌いなの？」と返され、「そういうことじゃなくて汚いからいやだ」といいながらも、現在は使用後の手袋をつけたまま他のところを触るということは少なくなってきました。

手洗いも以前と比較すると頻回に必要なタイミングで行われています。そして、スタッフに何かを頼もうと声をかけた時、「今、手汚れてるから、手洗うからちょっと待って」とスタッフに言われたり、清拭（身体拭き）を一緒にやったあとなど、「あれ？手洗った？」とスタッフ同士で積



極的に声かけをしているところもみられます。

看護スタッフの変化が、メディックにも影響を与えているのか、創部処置の後にメディックをガン見していると、「あ、手洗わないと思ってる？俺は手洗うよー、これから洗うよー」と言われることや、採血を観察していたら、メディックに「〇〇（何か）もってきて！」と言われ、ミャンマー語なので何か必要なかわからず、採血に使うもの全部持っていったら手指消毒用のアルコールを求めていた時がありました。このままメディックにも継続してほしいです。



毎週月曜日に IPU のスタッフが、手指消毒薬や石鹸を入れているボトルを交換しているため、中身が空のまま放置されないようになっています。

自ら、環境整備の清掃をしているスタッフもいます。気付いた人だけがやっているのではなく、全員が気がついた時にやれるような雰囲気になるといいと思います。



#### 事例

A ちゃんがメータオ・クリニックの外来を受診したところ、HIV の症状に似ているため、検査を行い陽性反応がでた。関連機関へ転送するまで小児科へ入院することになった。母親のみの付き添いのため、母親へ検査結果を伝える。家族構成は、母・父・3人兄弟（A ちゃんの上に2人）。入院時、家族に HIV 陽性者と診断されている人はいない。

#### 入院時の状況

口腔内に口内炎が大量にあり、歯ぐきから出血がみられる、痛みで唾液が飲み込めないため、常に唾液を口からティッシュに出している。皮膚に2cmほどの傷が複数あり、それが痒くて無意識に掻いている。

大部屋に入院中で、となりの患者のベッドとの距離は1m程度。となりの患者とその患者の兄弟がAちゃんと年が近いので、子供たちが近くで遊ぶ。

\*プライバシーに関わるので、となりの患者へ「A ちゃんが HIV だ」ということは伝えられませんし、A ちゃんの家族や親せきが来院した場合も、どの程度の人まで、HIV ということ伝えるのかは家族と相談して決めます。

さて、A ちゃんの唾液（や唾液が含まれたティッシュ）や傷口は血液が含まれている可能性があり、感染源として扱うため、家族やスタッフが素手で直接ふれることは避けます。また、A ちゃんが唾液や傷口に触れた手も汚染されているので、その手のままで他のこどもたちと遊ばない





ように注意が必要です。病院内の二次感染を防ぐためにAちゃん・家族・来院者への手洗いの必要性の説明、家族やスタッフの手洗いの徹底が大切になります。

「家族に手洗いの必要性は説明した？」

「母親にしたよ」

「今日来た父親は？」

「たぶんAちゃんのお母さんが言った」

「お母さんがしてくれると思う、ではなくて、自分の仕事だから、きちんと説明しないとだめだよ。ただ手を洗えと言われても、手洗いが必要な時もわからないし、そもそも石鹸を使って手を洗っているのかもわからないよ」

「そうだねー、父親にも言ってくるよ」

というような調子で、家族一人に言っておけば、あとはそっちでやってくれるよという雰囲気がかげえませんが、このような場合、スタッフはまじめに手洗いをしている光景を見かけます。

「この病気の時は手を洗って気をつけなきゃ！」ではなく、日ごろから、手洗いをする習慣を身につけて、どんな患者でも同じように手洗いをしてくれるといいなと思います。

## 国内から

【東京＝鈴木みどり】

皆様、こんにちは。

元現地派遣員で、現在 JAM 日本事務局ボランティアスタッフの鈴木みどりです。

帰国後は毎日慌ただしく過ぎてタイに行くことができませんでしたが、昨年11月に約3年振りでタイに旅行に行きました。その旅行について少し書かせていただきます。

タイは私にとって大変思い出深い場所です。約5年前、初めて海外に留学して不安な中でバンコクで1年半を過ごしました。その後 JAM 現地派遣員になるとは留学前は全く想像していませんでした。

旅行初日は、バンコクで現地の友人に再会した後、チェンライという、ラオス国境に近い町に移動しました。チェンライでの目的地のひとつは、市街地から車で1時間ほどで行けるプーチーファーという山でした。タイではこの山の頂上からみる日の出と雲海が人気だそうです。最近では外国からの観光客にも少しずつ知られてきています。

私は、現地のゲストハウスで知り合った人を誘ってタクシーをシェアして行けたらお得でいいなあと安易に考えていたのですが、滞在一日足らずでは誘えるような人は見つからず、結局一人で行くことにしました。深夜3時に予約していたタクシーに乗ると、ドライバーは真っ暗な中、いろは坂のような急カーブの多い坂道を飛ばしてくれて、途中から歩きの山道を親切にも案内してくれました。当初心配していた野良犬は全く見当たらず安心しました。山頂は東京の夜と同じような寒さで、ダウンを着て満天の星空を眺めた後、ラオス国境から



の日の出と素晴らしい雲海を眺めることができました。



チェンライに二泊した後はチェンマイにバスで移動しました。イーペンランナーと呼ばれるランタン祭りに参加するためです。ローイクラトンと呼ばれる灯籠流しと一緒に行われます。このお祭りはタイ全土で行われますが、チェンマイのお祭りは特に規模が大きくて綺麗なため、毎年世界中からたくさんの観光客が集まります。満月の夜、両手を広げてギリギリ持てるほどの大きさのランタンを約4500人の参加者が、ほぼ同時に空に飛ばすのです。その美しさに期待でいっぱいなのは、現地在住の友人と会う約束をして三泊することにしました。しかし、直前に彼の都合が悪くなってしまい、不案内な街で大丈夫かと思っていました。

そんな時、バスで偶然隣の席に座ったタイ人の女子大生ノッドちゃんに話しかけられました。彼女は偶然にもチェンマイに住んでおり、案内を申し出てくれました。話があまりにも上手く進んで大丈夫かと思いましたが、せっかくの機会と思い、彼女の申し出を受けました。彼女のおススメの有名な寺院やガイドブックに載っていない静かな古いお寺にも連れて行ってもらいました。タイの風習も簡単に教えてもらい、面白い体験ができました。お礼に交通費を全部だそうとすると、彼女は「私は(旅行を)全部シェアしたい」と言って帰りの交通費を先に全部支払ってくれていました。お祭りのランタンの綺麗さも忘れられないものですが、ノッドちゃんと出会えたことはまさに神様からの贈り物だと思います。

タイ最後の日はバンコクに戻り、留学中に通ったキリスト教会に行きました。ラチャターウィにあるこの教会の敷地内には学生寮とゲストハウス、タイ語学校があり、私も一時期その寮に住んだことがあります。立地と安さと規律、親切さが揃っていて、私にとって最高の場所でした。教会の明るく柔らかい雰囲気もそのまま、「ただいま」と故郷に戻った気持ちになりました。

タイに住んでいた時の2年10ヶ月は、自分の無力さを感じてばかりだったのですが、ここでたくさんの助けを受けて充実した時間を過ごした事も思い出しました。

今回はリフレッシュ目的の旅行でしたが、思いがけずタイ人の優しさに触れることができ、さらにタイに住んで良かったんだと再確認できました。

次回は、またメーソットに行きたいと思います。

## 編集後記

先日、念願かなって、いちご狩りに行きました。今まで一度も行ったことがなくて、いつか行きたいと思っていました。出発前に「4人分の入場料の額のいちごをスーパーで買ったらいんじゃないか」とか、夢のないことを言う人が我が家に約1名いたのですが、行ってみると、とても楽しい。なんと楽しい。いちごを「もういらない」と思うまで食べる幸せ。今年のシーズンが終わるまでに、また行きたいです。

そして夢のないことを出発前に言った人が実は誰よりも一番楽しんでいて、



